

労働映画百選通信 No.13 2016.12

発行 ■ NPO法人 働く文化ネット 編集 ■ 清水浩之 〒101-0062 千代田区神田駿河台3-2-11 連合会館5F

日本の労働映画百選 <http://hatarakubunka.net/>

『明治の日本』(1897)から『下町ロケット』(2015)まで!“働く姿”を描いた百本をセレクト

映画は日本の仕事と暮らし、働く人たちの悩みと希望、働くことの意義と喜びをどのように描いてきたのか。働くことの今とこれからについて考えるために、一世紀余の映画史の中から百本を選びました。

特定非営利活動法人 働く文化ネット・労働映画百選 選考委員会

明治の日本/川崎三菱労働争議/何が彼女をそうさせたか/第十二回東京メーデー/隅田川/生れてはみたけれど/有りがたうさん/戦ふ兵隊/煉瓦女工/機関車C57/或る保姆の記録/わたし達はこんなに働いてゐる/鷲進/炭坑/われら電気労働者/海に生きる/白雪先生と子供たち/どっこい生きてる/生きる/おかあさん/1952年メーデー/女ひとり大地を行く/蟹工船/京浜労働者/太陽のない街/立ち上がる女子労働者/ここに泉あり/赤線地帯/喜びも悲しみも幾歳月/ボタ山の絵日記/雪と闘う機関車/にあんちゃん/海に築く製鉄所/刈干切り唄/年輪の秘密大いなる旅路/裸の島/1960年6月 安保への怒り/西陣/キューポラのある街/その場所に女ありて/ある機関助手/ドキュメント 路上/68の車輪/こころの山脈/若者たち/農業禍/和賀郡和賀町/黒部の太陽/太陽の王子 ホルスの大冒険/男はつらいよ/シブヤードの青春/家族/戦争と人間 三部作/友子儀式/日本の稲作/詩人の生涯/トラック野郎 御意見無用/どっこい!人間節/日没の印象/男たちの旅路/日本の戦後/あゝ野麦峠/ザ・サカナマン/遠雷/海峡/原発はいま/魚影の群れ/ガン・ホー/マルサの女/母さんが死んだ/魔女の宅急便/あーす/月はどっちに出ている/踊る大捜査線/鯨捕りの海/鉄道員 ぽっぽや/人らしく生きよう 国労冬物語/こんばんは/県庁の星/フラガール/三池 終わらない炭鉱の物語/ハゲタカ/ハケン品格/おくりびと/フツの仕事をしたい/ブラック会社に勤めてるんだが、もう俺は限界かもしれない/任侠ヘルパー/孤高のメス/昭和の家事/サウダーチ/舟を編む/ある精肉店のはなし/ダンダリン 労働基準監督官/WOOD JOB!/紙の月/夢は牛のお医者さん/昼めし旅/種まく旅人 くにうみの郷/下町ロケット

NPO法人 働く文化ネット 労働映画鑑賞会

働く文化ネットでは、毎月第2木曜日に労働映画鑑賞会を開催しています。お気軽にご参加ください。

【2016年10～12月期】統一テーマ:労働映画のさまざまな視点

第34回 ～労働映画の源流を求めて～

- ・開催日:2016年12月8日(木)18:00~(参加費無料・申込不要)
- ・会場:連合会館 201会議室(地下鉄 新御茶ノ水駅 B3出口すぐ)
- ・上映作品:

(1) 明治の日本 1897-99年/白黒【労働映画百選 No.1】

1897年から99年にかけて日本を訪れたフランス・リュミエール社の技師コンスタン・ジレル、ガブリエル・ヴェールの二人が撮影した日本の風物の中から、当時の仕事と暮らしの一端をうかがえる作品をいくつか取り上げます。また、参考として、19世紀末フランスの仕事と暮らしの記録映像も併映します。

制作 ■リュミエール社 撮影 ■コンスタン・ジレル、ガブリエル・ヴェール ほか

(2) 隅田川 1931年/20分/白黒【労働映画百選 No.35】

昭和初期の隅田川で、船での運搬に働く父と、その息子の小学生の、一組の親子を中心に、川を行く各種の船、そこでの仕事の様々、水辺の生活や風物のいろいろな断片を織りこんで、当時の隅田川を巡る仕事と暮らしを伝える記録映像。

企画 ■文部省 脚本 ■雨夜全 撮影 ■藪下泰次 斎藤宗武



【作品ガイド】『浮き雲』 Kauas pilvet karkaavat / Drifting Clouds

1996年/96分 フィンランド 脚本・監督/アキ・カウリスマキ

出演/カティ・オウティネン(イロナ) カリ・ヴァーナネン(ラウリ)

《あらすじ》不況のため、共に職を失ってしまったレストラン給仕長のイロナと、路面電車の運転士・ラウリの夫婦。二人は次の職がなかなか見つからない。やがてイロナが新たな目標を見出し、二人は手を取り合いながら実現に励む。



【DVD】キングレコード

フィンランド・男女ともに労働が当たり前の国 文：清水洋子

寡黙でユーモア滲む、カウリスマキ監督の映画が大好きだ。『浮き雲』が日本で公開されたのは、1996年。まだバブルの喧騒が漂っていた時代だった。はじめて映画館で観た時、夫婦ともども失業しているのに、ひたすら淡々と再就職に取り組むストーリーに、「そこまでするか？」と吹き出してしまった。そして、カウリスマキはきっと、フィンランドを代表する変人なのだろうと思った。

2001年、仕事でフィンランドへ行く機会に恵まれた。首都のヘルシンキに降り立ち、映画で見た緑の路面電車を目にした時のミーハーな感激といったら。しかし、およそ2週間におよぶフィンランドでの仕事を終えて感じたことは、「カウリスマキ…、とりたてて変人じゃないかも。むしろフィンランドの社会をよく見ている」。わたしが体験したフィンランドは、日本よりやや小さい国土に、人口およそ500万人。行けども行けども森と、青い空と湖。そして、路面電車の運転士の多くが女性だった。ヘルシンキを歩きまわった時、「この街のガイドブックを作ったら…、すかさずになりそう。東京は…、街も人もテンション高過ぎる」。フィンランドの街に美魔女は歩いてない。静かで、簡素で、自然。

この作品は、ふたり揃って失業した夫婦(子どもはいない)が再就職するまでを描いている。夫は鉄道会社からリストラされ、妻は銀行が絡んでの企業買収により職を失う。この映画が製作されていた頃、フィンランドは不況の真っ只中であつたようだ。ノキアが世界の通信業界に躍進し、景気が上向きになるのは、この映画が公開された後。もっともそれ以前にフィンランドは、ふたつの大戦で隣接するロシアやスウェーデン、ドイツにやられっぱなしの歴史を持つ。男達は兵士として戦地に赴き、残された女性はフィンランドを維持するため、あらゆる仕事を賄わなければならなかった。「女性は働くべきか？ 働かざるべきか？」などという議論の余地はなかったのだ。その機運は女性の参政権獲得にも反映され、フィンランドは世界的にも早い1906年に達成を遂げた(日本は1946年)。もちろんどこの国のように <すべての女性が輝く社会づくり！> などといった、嘘くさいすり替えはない。日本は少子高齢化が進み、労働人口が減るだろう。世帯収入も減るから、女性も働くのが当たり前になるはず。その実情がフィンランドには、とっくの昔に浸透していたということだ。

この映画の主人公である夫妻は、失業して激情に駆られ、泣いたり鬱になつたりしない。「そういうものだ、それがどうした」と、ダメならダメで肅々と次の手を打つ。

あらためて『浮き雲』を見たら、今の日本の労働を取り巻くイヤなムードから離れられた。台詞はぼつりぼつりだけど、フィンランドにおける失業に伴う福祉制度、物価などの現実的な話題も細かく描写されていた。カウリスマキ、さりげなく社会派かも…。仕事に煮詰まっている、そこの貴方！『浮き雲』を観ましょう。くすっと笑えて、「なんとかなるさ」と気楽になれます。

【しみずようこ】1967年生まれ。テレビディレクターとして26カ国で労働。現在は主婦業とともに、福祉NPOで労働中。

【上映情報】労働映画列島！11-12月 ※《労働映画列島》で検索！ <http://d.hatena.ne.jp/shimizu4310/00161203>

◎名画座・特集上映

- 【東京 池袋 新文芸坐】11/20～29「台湾ニューシネマの魅力」…風櫃の少年/恋人たちの食卓/珈琲時光/他
- 【東京 シネマート新宿】11/26～12/16「ポーランド映画祭2016」…大理石の男/ユナイテッド・ステイツ・オブ・ラブ/他
- 【東京 シネマヴェーラ渋谷】11/26～12/16「妄執・異形の人々 文芸篇」…蟹工船/怒りの孤島/聖職の碑/他
- 【東京 京橋 フィルムセンター】11/29～12/25「知られざる東ドイツ映画」…臣下/石の痕跡/建築家たち/他
- 【東京 御茶ノ水 アテネ・フランセ】12/5～10「オータル・イオセリアーニ特集」…四月/素敵な歌と舟はゆく/他
- 【川崎市市民ミュージアム】12/3～25「ケン・ローチ初期傑作集」…キャシー・カム・ホーム/まなざしと微笑み/他
- 【会津若松市文化センター】12/2～4「会津シネマウィーク2016」…駅前旅館/スポットライト 世紀のスcoop/他
- 【大阪 九条 シネ・ヌーヴォ】11/19～12/16「監督・川頭義郎」…涙/かあちゃんしぐのいやだ/あねいもうと/他
- 【宝塚シネ・ピビア】11/19～25「第17回 宝塚映画祭」…王将(1948)/放浪記(1962)/花のれん/父子草/他
- 【広島市映像文化ライブラリー】12/7～15「バリアフリー映画週間」…息子/あん/渚のふたり/最強のふたり/他
- 【福岡市総合図書館・シネラ】12/1～25「イラン映画特集」…友だちのうちはどこ？/街の陰/未熟なざくろ/他
- 【北九州 門司市民会館】12/10・11「第8回 門司シネマフェスタ」…青い山脈/また逢う日まで/真昼の暗黒/他

【労働映画のスターたち】第13回「中井貴一」 文：百永良武

どんな球でも受け止める！ 職場を和ませる「二枚目半」のリーダー



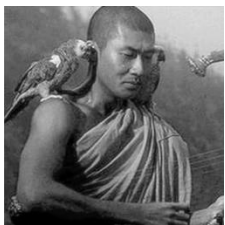
グッドモーニングショー (2016)



立花登 青春手控え (1982)



ふぞろいの林檎たち (1983)



ビルマの豎琴 (1985)



東京上空いらっしやいませ (1990)



お引越し (1993)

今や日本を代表する「二枚目半」スター。色男・美男子を「二枚目」、滑稽な道化役を「三枚目」と呼ぶのは、江戸時代の芝居小屋に掲げられた「八枚看板」にちなんだ表現なのだそうだが、中井貴一の場合、出世作となった『ふぞろいの林檎たち』(1983～97)で二枚目＝時任三郎、三枚目＝柳沢慎吾に挟まれた結果、真ん中で双方を調和させる「二枚目半」的なキャラクターが芽生えたのではないかと思う。

デビューから35年。時代劇からコメディまでジャンルを問わず主役を務め、検事もヤクザも演じ分けられる貴重な俳優となった。職場ではその生真面目さを、若手や女性陣にいじられながらも、いざという時には頼りになる「リーダー」格。最新主演映画『グッドモーニングショー』(2016、監督・君塚良一)では、人気に陰りの見え始めたニュースキャスターが、生放送中に起きた事件に翻弄される姿を、彼独特の「困り顔」で演じた。温和な表情のまま困惑し、落ち着いた声で愚痴をこぼすたびに、映画館に笑いが巻き起こっていた。三谷幸喜が「同世代で随一のコメディ役者」と評した絶妙な可笑しさは、彼が「おじさん」となってから本格的に開花した気もする。おじさん世代の希望の星・中井貴一の仕事を、労働映画の視点から迎えてみよう。

1961年、東京・世田谷区出身。父は『君の名は』(1953)『喜びも悲しみも幾歳月』(1957)などで有名な「二枚目」スター・佐田啓二だが、1964年に自動車事故で急逝。その時、貴一は3歳になる直前で、生前の父の記憶は殆どないという。父が買った家で、母と姉(中井貴恵)の3人だけで静かに暮らし、「我慢する」ことを覚えたという少年時代は、華やかなイメージの「二世俳優」の中では珍しい。

大学在学中の1981年、映画『連合艦隊』(監督・松林宗恵)で俳優としてデビュー。翌年にはNHKの時代劇『立花登 青春手控え』(1982)で、主人公の新米医師を演じた。佐田啓二が「現代的な」「甘い」二枚目として人気を集めたのとは対照的に、貴一の古風な佇まいは、兵隊や侍の役がよく似合った。当時は田原俊彦、近藤真彦ら「たのきんトリオ」の全盛期で、若い男の役柄といえば「美少年」か「ツッパリ」だった時代に、そのどちらにも馴染まない普通っぽさが買われ、山田太一・作のドラマ『ふぞろいの林檎たち』に抜擢された。

中井・時任・柳沢が演じたのは、名も無き四流大学で就職や恋愛に悩む、冴えない男3人組。学歴や家柄などと縁のない、「主役になれない若者」のリアルな青春を描き出したこの作品は、主人公たちが30代になった1997年まで続く人気シリーズとなる。成功した最大の要因は、彼ら3人組の人間関係がリアルだったからだろう。「二枚目」として動ける時任。場を明るくする「三枚目」の柳沢。その真ん中にヌボッと立ち、何を考えているのかよくわからないが、どことなく大物風のヤツ。こんな友人関係は男女を問わず、世界のどこにでもあるだろう。中身は意外と気弱で、情けない振る舞いも決して少なくないが、なぜかみんなに愛されている男。魅力の秘密は、どんなボールでも受け止められる包容力だ。1970年代までのヒーローとは少し違う、80年代ならではの「ぼくらのリーダー」像が、中井の登場によって確立された。

時代の流行とは一線を画したキャラクターが注目されると、市川崑監督の念願だった現地ロケのリメイク版『ビルマの豎琴』(1985)をはじめ、20代から30代にかけては巨匠やベテラン俳優との仕事が続く。映画『父と子』(1983、監督・保坂延彦)で共演した小林桂樹からは、「いつの時代もアウトローがもてはやされるけれど、それは正統派がいてこそ」と説かれ、俳優としての自らのあり方を再認識する。日本映画ニューウェーブの旗手・相米慎二監督の『東京上空いらっしやいませ』(1990)、『お引越し』(1993)では、新人女優の牧瀬里穂、田畑智子をさりげなくサポートしながら、演技から余分なものをとことん削ぎ落としていくと、初めてリアルな「芝居」が生まれることを間近に目撃した。忠臣蔵を描いた大作『四十七人の刺客』(1994、監督・市川崑)では高倉健と共演し、その後、中井が重大な決断を迫られた時には、適切なアドバイスを与えてくれることになる。日本全体がどこか浮かれていたバブル期に、学ぶべきことの多い仕事を積み重ねた経験が、次の時代に花開いていった。

《次頁へ続く》

遣唐使、新選組、アメリカ……単身赴任で磨かれる「ぼくらのリーダー」!

30代の終わりになると、中井に公私の両面で大きな出来事が訪れる。私生活では、父の年齢「37歳」を追い越したのが契機となり、39歳で結婚。ちょうどその頃、中国映画から出演のオファーが来た。NHK大河ドラマ『武田信玄』(1988)、映画『梟の城』(1999、監督・篠田正浩)など、若手の頃から時代劇への出演が多かった中井を、「日本人らしい俳優」として指名してきたのが、唐の時代を舞台にしたアクション大作『ヘブン・アンド・アース 天地英雄』(2004、監督 ホー・ピン)。日本から「遣唐使」として派遣され、皇帝の命令で反逆者を追跡する剣士の役だった。引き受けるかどうか迷ったが、合作映画の出演経験がある高倉健から「外国での仕事は、ひとりの人間として大きく成長する機会だよ」とのアドバイスを受け、出演を決断した。



ヘブン・アンド・アース
天地英雄(2004)

撮影は2001年の秋、新疆ウイグル自治区で行われたが、日本から単独で現場に参加した中井は、長期にわたる中国滞在で言葉と文化、生活面での壁に直面し、文字通り「遣唐使」の心境を味わった。発音・食事・トイレの三重苦(?)に耐えた「単身赴任」の経験は、帰国後の仕事にも様々な形で反映されていく。



壬生義士伝(2003)

幕末の京都を舞台にした映画『壬生義士伝』(2003、監督・滝田洋二郎)では、家族を養うために故郷・盛岡から脱藩し、新選組に入隊した「出稼ぎ侍」に扮した。当初は隊の中で田舎者、守銭奴などと軽蔑されていたが、着実な仕事ぶりと温厚な人柄で次第に信頼を集めていく姿は、40代に入った中井の落ち着いた雰囲気にとぴったりの役だった。



燃ゆるとき(2006)

1980年代、アメリカに進出した日本の食品メーカーを描いた映画『燃ゆるとき』(2006、監督・細野辰興)では、カップラーメン工場の立て直しに派遣された、資材担当の営業マンの役。黒人やヒスパニックの労働者と衝突したり、アメリカならではの企業買収騒ぎで窮地に追い込まれたりの日々を、誠実さと情熱で乗り切っていくジャパニーズ・ビジネスマン。会社の創業者(津川雅彦)が「かつて戦争で負けた国に、今度はビジネスで攻め込むんだ」と呟く通り、日米の「経済戦」をテーマとした作品で、その最前線に立つ中井は、文字通り「ちよんまげのないサムライ」だった。



鳳凰 わが愛(2007)

2007年、再び出演した中国映画『鳳凰 わが愛』(監督 ジヌ・チェヌ)では、日本側のプロデューサーも務め、脚本作りや資金調達に初めて携わった。20世紀初頭の中国を舞台に、刑務所で出会った男女が30年にわたり、叶わぬ恋心を抱き続ける物語。チャン・イーモウやチェン・カイコーなど、中国映画のニューウェーブ(第五世代)が登場した頃を連想させる悠大なスケールの映画で、坊主頭でじっと佇む中井の姿は、中国の大地に見事なまでに溶け込んでいた。



RAILWAYS(2010)

島根県下で撮影された映画『RAILWAYS』(2010、監督・錦織良成)は、「49歳で電車の運転士になった男の物語」という副題通り、仕事一筋で生きてきたサラリーマンが、第二の人生に踏み出す過程を描く。50代を目前にした男が、子どもの頃からの夢だった鉄道の仕事に生きがいを見出す様子に、多くの観客が共感した大人のファンタジーだ。中井は2002年にもNHKのドラマ『迷路の歩き方』で地下鉄の運転士を演じているが、こちらは逆に、規則通りに列車を走らせ続けてきた男が、人生初の「オーバーラン」を起こして立ち止まるというストーリーだった。



最後から二番目の恋
(2012)

50代に入ってから最大のヒット作は、フジテレビのドラマ『最後から二番目の恋』(2012)だろう。鎌倉に住む4人兄妹の長兄で、市役所の観光課長として働く実直な男が、隣家に引っ越してきた勝気なテレビプロデューサー(小泉今日子)と出会い、「仲良く喧嘩する」間柄になっていくラブコメディ。個性豊かな登場人物の狭間で右往左往する「ぼくらのリーダー」は、『ふぞろいの林檎たち』以来の中井の十八番だ。

デビュー直後から最新作までを駆け足で眺めてきたが、俳優・中井貴一の魅力とは、社会派作品からナンセンスコメディまで、どんな作品に登場しても不思議ではない、確固たる存在感だろう。彼が尊敬する高倉健と小林桂樹、そのどちらにもなりきれぬ芸域の幅広さ、懐の深さは、現代に生きる我々おじさんたちも進んで見習うべきだと思う。さあ、これからも一緒に歩いていこう、「ぼくらのリーダー」中井貴一と!

(参考文献 「日記」中井貴一・著 キネマ旬報社 2004年)